

教 仁 名 聞

第 96 号
(発行日)

2018 年 9 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20
電話・FAX (0798)
63-4488

(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉
毎月 2 日 午後 2 時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月 2 日と 12 日 午後 3 時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月 6 日 午後 7 時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始。
* 8 月は 2 日の念仏座談会と 6 日の聖典学習会以外は休み。

善悪と真宗の人間観

真宗の人間観の中で大事な言葉として、

一・共にこれ凡夫のみ
(聖徳太子)

一・遇善の凡夫と遇悪の凡夫
(善導大師)

一・さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべし
(親鸞)

一・人みなアミダ仏とともにいる

という言葉があります。

なべて人間は煩惱具足の凡夫であります。欲と瞋りと愚かさをかかえている凡夫(ただのひと)であって、煩惱のない人などは殆どいないでしょう。

そして、このような煩惱を本質としている人間も善い縁に遇えば(遇善)善いこともする。困っている人を助けたり貧しい人たちに援助したり、あるいは孤独な人に寄り添ったりすることもありません。逆に悪い縁に遇う(遇悪)と人に暴言を吐いたり、差別

したり、暴力を振るったりもします。

しかしどちらにしても共に煩惱具足の凡夫です。善い縁に恵まれるか悪い縁に巻き込まれるかでふるまいが違ってきます。どういう縁に遇うかによって凡夫は「いかなるふるまいもする」ものです。

縁によっては周りの人たちに賞賛されるほどの善いことをしますが、縁によってはとんでもない罪を犯してしまう場合もあります。

そういう意味で、縁によってそのつど善人になったり悪人になったりしているといってもいいのでしょうか。一日の上でも、あるいは一生の上でもそれはいえると思います。

そして自分が煩惱の染みついていて愚かな者であると感じるなら、まずは悪い縁にはできるだけ近づかないようにしたいものです。悪い縁に近づくとどうにかしておぞましいこともしかねません。

宗祖も『ご消息』の中で、

ひるがえって、今度のオウ

《 秋季彼岸会 》

九月二十二日 (土)

午後二時始まり

「善導の御おしえには、悪をこのまんひとをば、うやまいて、とおざかれとこそ、至誠心のなかには、おしえおかせおわしましてそうらえ」と仰せられています。

善い縁に近づくことも大事ですが先ずは悪縁を避けることとしましょう。

ただ悪い縁は必ずしも「悪い縁です」という看板をかけたいてるわけではないでしょう。結構「良さそうな姿」をとってくるものです。だからそれに引つ張られやすい。これを見分けることは容易ではありません。どんなにしつかり者であり、賢明であり教養があっても、悪縁を見分けて対処することは容易ではないでしょう。

しかも困ったことには煩惱深きゆえに、善い縁も悪い縁にしてしまいかねない凡夫です。

ム事件のことを考えてみますと、この七月六日と二十六日と合わせて十三人のオウム関係者に死刑が執行されました。胸の痛む出来事でした。

このことをさきほどの真宗の人間観から考えてみますと、死刑になった彼らと私たちとは別種な人間かというところ、「共にこれ凡夫」であり、煩惱具足の凡夫であることに変わりはありません。私たちは善人で彼らは悪人であるときめつけることはできません。

ことに今回の十三人はオウムに入る前までは真面目な青年だったということです。

ではどこで違ってきたのか。それは人間性が特別に悪性に変わったのではなく、悪い縁にひきずられたとしかいえないでしょう。オウムの指導者の浅原の言葉などは表面上悪しきものとは思えなかつたと思います。寧ろ聖者のように思わせられたのでしよう。オウムの縁に誘われて入信し、その中でさらに洗脳さ

れて、浅原を絶対化させられていったのでしよう。その結果がオウム事件となり、収監されて死刑になった。元はと言えば、悪縁にひきこまれた結果です。

そしてだれも自分はそんな縁には引き込まれないという保証はありません。「オレオレ詐欺」のような単純なことでも、(私はしっかりと知っているからだまされないと)思っている人が同じようにだまされるので、この手の詐欺もなくなりません。

とにかく善い縁に遇うか、悪い縁に遇うかの違いはあっても、人間そのものは共に煩惱具足の迷いやすい人間であることで同じです。

犯罪を犯した人を糾弾して裁いている場合、とかく「おれは善人だ、悪いことなんか一生しない。犯罪を犯すような悪人は排除すべきだ」という考えになりがちです。

「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいも」するのが我々凡夫です。だから自分自身が今後どういう縁で悪い縁に引きずられて罪を犯すかも知れないのです。

自分の立場を守るために国会という公の場で国民に対して虚偽をかたる。こういうこ

とをする人は特別な悪人かという点、日頃は真面目な人ではないでしようか。しかし同じ煩惱具足の人です。さるべき業縁によつてはこういうことをしてしまふ、あるいはせざるをえなくなるのでありましよう。

それと、オウム事件の様なことが起こると、「だからもう宗教なんていうものには近づかない方がよい」という人がいます。しかしそれは早計です。

人は「本当の生きがい」「真実に遇いたい」「満たされたい」という深い欲求をもっている存在です。多くの人は「いまのままではいけない」と

「このままではいけない」と思いながら生きています。それが自覚的になったとき、何かを求めるようになりま

ただ、そういう場合、世の中にはたくさん宗教や思想や精神療法や行動団体の話があり、その中でどれがまともであり、危険でなく、善きものであるかを判断すること、

これは以外と難しいです。そのためには、宗教とは何か、真理とはどういうものかという基本的な教養なり知識を育んでおくことが必要だと思

思います。オームで死刑になった人たちは自然科学に対する知識は豊富でしたが、宗教的な教養は乏しかったと言われています。オームに限らず日本の知識人は宗教に対して存外無知で、高校の社会で習った程度の知識の人が多い。

人がいったん「生きている本当の意味を知りたい」「私は結局どこへいくのか」などという深い欲求が起こったとき、何処に解決を求めて良いか分からぬ。そういう場合が多いに違いありません。そうすると身近に勧誘してくる団体やサークルなどに引き寄せられていくことはよくあること

です。宗教に無関心になつておれば危険はないのではなく、むしろ危険です。特別な信仰はもたなくても、宗教とは何かということを正確に学んで正しい理解をしておくこと、これが危険なものに近づかないある程度の防波堤になりま

よう。宗教的に無知であることは危険にさらされていることでもあります。ネットに無知な人はネットウィルスの危険にさらされているようなものです。最後に、非常に大事なことは、阿弥陀仏が私たちととも

にいて下さるといふ存在の基本的な真実にふれることです。善をなすも悪をなすも、あるいは善人であろうが悪人であろうが、人にはただ単純にアミダ仏(いのち量りなく光り量りない)がともにいて下さる。アミダ仏に於て私たちは存在することができるといふ平等な真実に裏打ちされています。

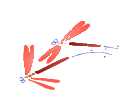
そしてこのアミダ仏の大悲の真実にであうと、たとえ悪しき縁がきてもそれに振り回されることは当然減少するでしょう。なぜなら私たちがアミダ仏に遭遇していないということが心の芯、いのちの芯がおのずから空虚になります。空虚になると外に充実を求めようとするので、悪しき縁に巻き込まれやすくなるといえます。

アミダとのであいは、悪縁を遠ざけ、善縁に心を寄せる力になってくると思います。

【念佛寺発行書籍】
(一)『木村無相・お念仏の便り』
(二)『松並松五郎念仏語録』
(三)『真宗の念仏と信心』
(四)『真宗教学の諸問題』
(五)『仏に遇うまで』
(六)『佐々木蓮磨・法味寸言』

〈遠方法話予定〉

- 九月廿八日。札幌市白石区。昭念寺(興正派)。午前・午後
 - 十月四日。名古屋。高畑開法会館。午前十時より法話・座談
 - 十月七日。福井市照手町。安居寺法話。午前・午後
 - 十一月七日。名古屋。「名鉄・前後駅下車すぐ」西雲寺。午前十時より法話・座談
 - 十二月十五日(夜)から十六日(午後)。姫路市。西源寺。
- (詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)



如来興世の本意には

(和讃問答)

如来興世の本意には

本願真実ひらきてぞ
難値難見とときたま
猶霊瑞華としめしける

(浄土和讃)

現代語訳（諸仏がこの世にお生まれになった本意は、第八願の本願の真実を説き開くためである。この本願の普遍的な真実に遇い、信を得ることとは大変難しいことである。それはちょうど三千年に一度しか咲かない霊瑞華の花が咲くようなものである）

N 「諸仏がこの世にお出まし下さったのは弥陀の本願を説かれるのが本意であると言われますが、諸仏の教えでは聖道門の教えが多いと思います。これは本意では無いということでしょうか」

D 「宗祖は、仏の教えをどこまでも自分自身の上に聞いていかれました。いわゆる教化する人として生きるのではなく、教化される人として生き

られました。そこから諸仏の教えである聖道門は自分にとつては本願真実へ導くお手立ての教えであつて、諸仏が聖道門を説かれた本意は本願の真実に帰せしめんがためであつた、と受け取っておられま

す」

N 「宗祖は仏教の教えを自身へお聞かせ下さる教えといただかれたのですね。では聖道門の教えは本願真実へのお手立てとおっしゃいましたが、それはどういう意味ですか」

D 「たとえば少欲知足の生き方とか衆生の幸せのために身を捧げるような菩薩の生き方を聖道門ではよく説かれています。また阿含経などを読むと聖者の生き方が詳しく説かれていきます。それは人としての理想的なあるべきすがたです。人はこうあるべきである

と知らされるのです。そして又、それによつて私たちは自分の生き方や生き様が反省させられるのです。いわば私の生き方はどれほど濁っており、浅ましい生き方をしているか

が自己批判されるのです」

N 「そうすると聖道門の教えによつて自分の生き方が照らし出されて、いかにも煩惱の深い、罪深い生き方をしていると知らされるのですね。そしてあるべき本當のあり方（仏・菩薩）を願うべきことを教えられるのですね」

D 「ええそうです。ただ、そういう聖道門が説いているような生き方をしなければ助からないと宗祖は仰っているのではありません。聖道門は尊い教えですが、自分の能力ではとてもそうはなれない、罪悪深重の凡夫であると知つて、

そういう私たちに對してアミダ仏は（汝、念仏申すばかりで汝の罪を除き浄土に生まれさせて仏にする）と誓われ、私たちに南無阿弥陀仏となつてはたらきかけて下さる、その大慈大悲のお助けに遇わせて頂きなさい、とお念仏の救いをお勧め下さるのが宗祖です」

N 「聖道門は大事ですが、それは愚かな私にとつては救いにはならない。いよいよ私が救われるのは浄土の教えである、といわれるのですね」

D 「ええそうです」

N 「ただ、歴史上には道元禪師とか空海さんなどは、聖道

門で悟りを開かれたのでしよう。そういう方がおられるのなら、私たちもそれに見習つて聖道門の教えに従つて修行をしていけばいいのではないかと、という疑問もありますね」

D 「それが出来ると思うお方はその方向に進めばいいのでしよう。ただ宗祖はともそ

ういうお方のまねは出来ない。そういうお方は、既に仏になつた方がこの世に還つて来て、衆生に人間のあるべき姿を知らせて下さる、そういうお方とみておられるのです。それは仏教の聖者たちだけではないといえましょう。たとえば聖フランシスやラーマクリンユナやマハトマ・ガンジーなどの聖者や偉人もこのようなお方であるといえましょう」

N 「次に本願真実とは」

D 「まず真実ということですが、これは真なる実在と受け取るのがわかり易いと思ひます」

N 「真なる実在とは」

め真実を覚らしめることによつて、衆生の一切の苦を除きまことの安樂を与えようと願つて働きたもうまこと。それで本願真実とは、一切衆生に本當の安らぎを与えたいと働きたもう量りないのちの働きたもといつていいでしょう」

N 「そういう働きをアミダ仏といわれるのですね」

D 「ええそうです。アミダ仏は量り無いいのちであり、光明であるといわれます。光明は一切衆生を救う働きのことです」

N 「本願真実（ひらきてぞ）とは」

D 「こういう本願真実を知らなくて迷ひ苦しんでいる私たちに本願真実の働きを説いて知らせて下さるお方が釈尊です」

N 「難値難見とは」

D 「釈尊の説法、ことに本願真実を説かれた説法にあつてそれを信じることは大変難しいと仰せられるのです。（値）も（見）も信じてことです。本願の教えに本當にあうとはアミダ仏のお心を聞き開くことです。信じてことです。それは大変難しい。それはちょうど霊瑞華というメツタに咲かない花が咲くようなものと仰せられるのです」

お便り

N 「それほど遇いがたい本願真実にはからずも遇わせていただいたという感動がこのご和讃に感じられますね」

D 「そうですね。ここで注意すべきことは、本願真実にあることは難しいといわれるのですが、実はだれでもあえるように本願真実は今も万人にはたらきかけて下さっているのです。そのことは、たとえは今ナムアミダブツと称えてみて下さい。その一声が本願真実が私たちにであって喚びかけて下さっている証拠なのです」

N 「ナムアミダブツとお念仏する、その一声が本願真実なのです」

D 「ええそうです。一声のナムアミダブツは（われ汝と共にあり、汝を助ける）と喚びかけたもう本願真実そのものです」

N 「だれでも今、お念仏するところにあえる可能性があるのです」

D 「ええ、そうです。しかし私たちはあいたいと思っていないし、あっても気がつかないし、教えていただいても素直に受け取らないのです。自分の考えの中に入り込んで、ナムアミダブツの仰せを受け入れないのです」（了）

T・S氏からの便り

（T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの八月号よりの続きです。太字の部分は無相さんのお便り）

法信⑩の続き（これ一つ）

親鸞聖人ほど我々凡夫の「機の助かりなさ」を深刻に思わなければならないと思われ、お方はないと思われ、お念仏にたすけまいらさずべしとよき人の仰せをこらむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

結局のところ、実にカンタン、明瞭で「ナムアミダブツ」これ一つであります。

☆私思う。法の信心、弥陀の願心大悲心をいただくには、自己の「機の助かりなさ」を信知するところに自覚するところに自然と「本願の願心」法の信心が回向されるのです。否、もつと積極的にわが弥陀はおっしゃる、汝の「アカン機」こそがわが弥陀の本願相応の正客であるぞよと。本願相応の機に本願相応の念仏を

与えるぞとのお示しです。絶対無能の自己と念仏に照らされ、願心に照らされ、その絶対無能の自己がまた本願を照らし、いよいよ本願念仏が我が無能の自己を照らし収める。法然上人いわく、この浅き教えが深きなりと

以上が木村無相師の最後の法話であります。本当にありがたく私は無相師の79年の生涯のご苦勞にあらためて感謝の気持ちで注記を書きしるすものであります。と同時に、土井師の求道精神のお陰でもあります。深く感謝するものであります。

今まで信心を得なければと私も迷いました。ただ多くの念仏衆生が勘違いされ迷い苦勞されたことか。しかし、凡夫の信心もハカラワヌも何の用もないことがはつきりとお示しくださいませ。

無相師は「他力の信心は弥陀の願心である」とハッキリとお教え下されています。

弥陀の願心「ただ念仏」は私の無能でナントモナイ宿業の泥中の悲しみより来たりくだされたのであります。

「ただ念仏」は弥陀の願心であるゆえに「ただ念仏」が自ずから信ずることになるなり

であり、弥陀の仰せに従うことになるなりであり、よき人の仰せに従うことになるなりであり、ハカライをやめることになりなりであり、他力に随順することになるなりでありました。

弥陀の本願の仰せがこの私のための仰せであり我が機相応であるゆえに私を信じて下さる如来の信心でありました。不可称不可思議不可説の仰せ本願念仏でありました。

弥陀の願心はここに機法相応の南無阿彌陀仏に成り給い私に回向して下さるのであります。

無相師の「果遂の誓い」の説法は今でも誰もがハッキリとは説いて下さらなかつた大法信であります。弥陀の願心が一旦信ぜられれば、何度迷おうが何度疑おうが心配ない、必ず信の一念に戻らさせていただきます。ただけるのだとお教えください。我々凡夫は死ぬまで迷い疑い信ぜられぬのです。

これが凡夫の實相なのです。ここにかかった弥陀の願心信ずれば何も心配いらぬのです。これが「果遂の誓い」のはたらきなのです。「果遂の誓い」の20願は教えざれども18願に転入されるのであります。

本当によくぞお教え下されました無相菩薩様であります。

歎異抄にある「親鸞の信心も法然上人の信心もただ一つなり、如来より給わる信心なり」ということも木村無相師から教えただいて初めてわかったことでありました。

ただ弥陀の仰せが我が安心であると信知されれば、念仏することがはからわずして弥陀を頼むことになるなりであり、本願を信じてることになりであり如来の仰せが我が信心であると信知されれば、無相師の信心も親鸞の信心も法然上人の信心も皆同じなのです。我が心の信じ心でないこと我が心に一切用がなかつたのであります。

我が安心

弥陀の願心、我が安心
我が信心あるうがなかるうが
みなそらごとたわごと

我が機は死ぬまで迷うゆえ
弥陀は我が機の親となり
弥陀の願心、我が安心
ただ南無阿彌陀仏と仰ぐばかり